

中南信支部総会出席の報告

2018.11.6

原田義則（65期、副会長）

11月3日の文化の日に松本にて開催された第25回上田高校同窓会中南信支部総会（小池健一支部長(67期)）に関東同窓会を代表して出席しました。出席者は来賓の金子元昭同窓会理事長（68期）、母校の柳澤忠男教頭先生ほか、48期の大先輩から108期の若手まで計55名でした。地元らしく銀行や県職員毎の「職域幹事」が選任されており、組織固めには好適な体制かと思いました。

小池支部長の挨拶の後、金子理事長による来賓挨拶がありましたが、当日文化勲章を授与され、親授式では受賞者を代表してお礼を述べられた金子宏東大名誉教授（47期）は金子理事長の「またいところ」であるとの発言があり、皆様を驚かせました。柳澤教頭先生からは大学進学実績、スーパー・グローバル・ハイスクール活動を中心とした母校の活躍振りが報告された後、

信濃毎日新聞社の論説主幹である丸山貢一さん（72期）による「コラム『斜面』の舞台裏」と題する講演がありました。1950年に連載開始された「斜面」は今日に至るまで ①5段落で構成する、②段落を区切る記号◆は上下上下と波打つように配置する と言った厳しい制約を自らに課しているとの「作法」から始まり、幾つかの記事の校正のプロセスを具体的に示すことで短い文章で伝えたいことを的確に表現することの難しさと面白さを述べられました。更には戦前の信濃毎日新聞の編集に携わった先人たちに対する弾圧の歴史と先見の明に関する話がありましたが、最後に紙面を通じて読者と心を通わせることもあることを紹介されました。16,000人の守備隊が玉砕したペリリュー島からの最後の暗号電文「サクラ、サクラ」を受信した通信兵だった方の短歌「玉砕を告げ来し無電は“サクラ”なる桜の花になお心痛む」を引用し、今なお「桜に対し目を背ける人もいる」とコメントした「斜面」を読んだ信毎読者の「私の声」欄への投書（この方は御父上をペリリュー島の玉砕で亡くされ、最後の電文が「サクラ、サクラ」だったことを知ってからずっと春になっても桜を拒絶して来たが、『同じような想いを持つ人がいることを心に止めたい』との「斜面」のコメントに涙が止まらなかったとのこと）を引用し、記事を書く時の気持ちを大切にしたいと考え続けているとのことでした。

引き続き、部屋を移して和気あいあいの懇親会が開催されました。最長老の中曽根義明さん（48期）の^{かくしゃく}豊饒たる挨拶と乾杯の音頭が会を盛り上げました。80期以降の会員も10数名おり、中には関東から転勤で松本に移り、初めて参加した会員もいたのですが、ヒューマンネットワークの多彩さに驚き、「関東同窓会に参加しておくべきだった」との感想を述べていました。「若年」会員をもっと惹きつける活動の重要性を改めて認識しました。